[illegible]月新續集

へ4
2213
2山

古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　よみ人しらす

郭公なくやさ月のあやめくさ
あやめもしらぬこひもする哉

素性法師

音にのみきくのしら露よるはおきて

ひるは思ひにあへすけぬへし
紀貫之
よしの河岩波たかく行水の
はやくそ人を思ひ初てし
藤原勝臣
白波のあとなきかたに行舟も
風そたよりのしるへなりける

在原元方
音羽山をとにきゝつゝあふさかの
関のこなたに年をふるかな
たちかへりあはれとそ思ふよそにても
人に心をおきつしら浪
貫之
世中はかくこそありけれふく風の

めにみぬ人もこひしかりけり

右近のむまはのひをりの日むかひに
たてたりけるくるまのしたすたれより
女のかほのほのかにみえけれは
よむてつかはしける

在原業平朝臣

みすもあらす見もせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかめくらさむ

かへし　よみ人しらす

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ
おもひのみこそしるへなりけれ

春日のまつりにまかれりける時に物見に
いてたりける女のもとに

許に家をたづねてつかはせりける
みぶの忠岑
春日のゝ雪間をわけておひいでくる
草のはつかにみえし君はも
人の花つみしける所にまかりて
そこなりける人の許に
後によみてつかはしける
貫之
山桜霞のまよりほのかにも
見てし人こそこひしかりけれ
題しらず　もとかた
たよりにもあらぬおもひのあやしきは
心を人につくるなりけり
凡河内躬恒

初雁のはつかにこゑをきゝしより
中そらにのみ物を思ふかな
躬恒
逢ふ事は雲井はるかになる神の
おとにきゝつゝこひわたるかな
よみ人しらず
かたいとをこなたかなたによりかけて
あはすは何を玉のをにせん
夕くれは雲のはたてに物そ思ふ
あまつそらなる人をこふとて
かりこもの思ひみたれて我こふと
いもしるらめや人しつけすは
つれもなき人をやねたく白露の
おくとはなけきぬとはしのはん

千早振うしのやしろのゆふたすき
ひとゝし君をかけぬ日はなし
秋霧をわかるゝ雲にみちぬらし
かくやとゝいつもなし
もろこしの田子の浦はたのむたよりし
あまとし君かいはぬ日はなし
ゆふ清くよるもや君か為の松の緑の

こゝろをぬらしたまは
日の山のこひ乃いかにかく
あさくさつゆをやまかすかにつき
吉野の山つもりもとしの法
あまはかをかくし言をしぬとし
歌つきのつましよとはあまてをまき
おもかけの恋のうらとしものき

山たかみ志た行水の志たにのみ
流てこひむ恋はしぬとも
おもひ出るときはの山のいはつゝし
いはねはこそあれこひしきものを
人しれすおもへはくるし紅の
すゑつむ花乃いろに出なん
秋乃野のをはなにましり咲花の

いろにやこひむあふよしをなみ
我その乃梅のほつえに鶯乃
ねになきぬへき恋もするかな
足引乃山ほとゝきすわかことや
君にこひつゝいねかてにする
夏なれはやとにふすふるかやり火の
いつまて我身したもえをせん

恋せしと御手洗河にせし禊
かみはうけすそなりにけらしも
表てみてとなむありけるとかや
是の御門はかほかたちよくおはしまして
かたちはいとよかりけるを御覧じつゝ
かなしかりけるとかやいひけり
科なき人のつみとかやうけてなむ

枕の上にしくしくなきて絶
あきらけみの小川の藤原忠ゝのも
へてしめやしてあしかり
あやしき所に居てかいとこの
ますらをのときの宮のみのうつ
思ひしをしめしあはれにて人のいはれや
みそきたゝくとくなれ

いつはりを人およとうあめかはわれの
心たのもし遠きかなよそ
伊勢の海に釣する海士のうけなれや
こゝろひとつを定めかねつる
伊勢の海の海士のつりなはうちはへて
くるしとのみやおもひわたらん
瀬河かよ水かたゝつも見

わかよ晴日の月のかけ
たゝ神あまてる岩戸の松はすむねを
窓かしいとあはきさためや
朝たゝ何霧の雲のみ
うらそらものあを世の
思ひ晴日あけなたつの
かもしかをしかのみぞなく

唐衣日も夕くれになる時はかへし
かへしそ人は恋しき　云
夕くれはかならしもかくしもあらし
つねはそのうへに夢はまさる人を見
恋しきをかへすかへすおもひ
しいやましになるへき
人のうへにあてゝいへり

侍りしころ恋しさと
あるやうに人目をしのひて
かよひけるを人にしられ
あひ見てのちかへりて
つまなき人をまつと思ひ
はるかに人をいかて山たかの
さくらつゝみのうちに

河水にたゝかそうくおもひけるにかゝるを
かくもぬ人をかくもあらぬ身に
人をのみ思ひ定めて侍りあれはたゝや
身のうへをのみなけきてしたまひし
かくてのみありけるのちにかゝるかな
ゆめにのみ夢にそ逢人のあらは
今の世にはあらはれつゝ

くもゐにしるへもなくて人の
恋しさはたゝにまちつゝあかしてまつ
夜をしらぬに夢にそ見えつ
川辺にもかゝる枝にはあり
いめしらうにみえてみえし
恋しさはかりのかたちのおもかけ
ちりをのこして人まちえてのちに

かゝり火にあらぬ我身のなそもかく
泪の河にうきてもゆらん
かゝり火の影となる身のわひしきは
流てしたにもゆるなりけり
早き瀬にみるめおひせは我袖の
涙の川にうゑましものを
おきへにもよらぬ玉もの浪のうへにみたれてのみや恋わたりなん
あしかものさはく入江の白浪の
しらすや人をかくこひんとは
人しれぬおもひをつねにするかなる
ふしの山こそ我身なりけれ
飛鳥のこゑもきこえぬ奥山の
ふかき心を人はしらなん
逢坂のゆふつけ鳥も我ことく
人やこひしきねのみなくらん

相坂乃あらしのかせはさむけれと
ゆくへしらねはわひつゝそぬる
うちわたすをちかた人にものまうす我
そのそこにしろくさけるはなにの花そも
おもひやるこしのしら山しらねとも
ひとよもゆめにこえぬ夜そなき[illegible]
心うくも[illegible]かくいはゝかし

くもゐにて[illegible]
よそにのみ[illegible]
[illegible]
君か心[illegible]
あふ[illegible]
よみ人しらす[illegible]

夏刈のうみつゝかるあしのかし
なにはおもひよるよしもかな
夕暮はとひくる人もなかりけり
秋の霧さへかさなりにけり
河とをし露にぬるゝもかくし
袖のゆかりはあやしかりけり
稲の田のかりほのいほにふしのめ

あきはこゝろもつきぬへし
秋の田のほにいでてこそ稲妻の
みえつるほともやかてきえぬれ
あめふれはあやなくぬれてしか
あきはこのましもそれしるく
河せのさきのなかれかくしつゝ
秋風のたえまたえまにふく風

奥山のすかのねしのきふる雪の
けぬとかいはん恋のしけきに

古今倭歌集巻第十二

恋歌二

題しらす　小野小町

思ひつゝぬれはや人のみえつらん
夢としりせはさめさらましを

うたゝねに恋しき人をみてしより
夢てふものはたのみ初てき

いとせめて恋しき時はむは玉の
よるの衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき
人をそたのむくるゝ夜ことに
志もついつもてらに人のわさ
しける日真せい法師のたう

しにていへりけることはを
哥によみて小野小町かもとに
つかはせりける
安倍清行朝臣
つゝめとも袖にたまらぬ白玉は
人をみぬめの涙なりけり
返し　こまち
おろかなる涙そ袖に玉はなす

我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

恋わひて打ぬるなかにゆきかよふ
ゆめのたゝちはうつゝならなむ

住の江の岸によるなみよるさへや
夢のかよひち人めよくらむ

をのよしき

わか恋はみ山かくれの草なれや
しけさまされとしる人のなき

紀友則

よひのまもはかなくみゆる夏虫に
まとひまされる恋もするかな

夕[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

君[illegible]

[illegible]

しぬる命いきもやすると心みに
玉のをはかりあはむといはなん
侘ぬれはしひてわすれんとおもへとも
夢といふものそ人たのめなる
よみ人しらす
わりなくもねてもさめても恋しきか
心をいつちやらはわすれん

恋しきにわひてたましひまとひなは
むなしきからの名にや残らん
紀貫之
君恋る涙しなくはから衣
むねのあたりは色もえなまし
題しらす
世とともに流てそ行涙河

みえしゝゝゆめうちそはかなき

夢路にも露やおくらむ夜もすから
かよへる袖のひちてかはかぬ

素性法師

きりたちててる日のもとはみえすとも
身はまとはれしよるへありやと

菅原大臣

照りもせすくもりもはてぬ春の夜の
おほろ月夜にしく物そなき

大江千里

わくらはにとふ人あらはすまの浦に
もしほたれつゝわふとこたへよ

中納言行平

秋ゝとあや遊しきうときん

時そともなくよたゝなくらん

つらゆき

さ月山梢をたかみほとゝきす

なく音空なる恋もするかな

凡河内みつね

秋霧のはるゝ時なき心には

たち井の空もおもほえなくに

清原ふかやふ

虫のことこゑにたてゝはなかねとも

泪のみこそしたになかるれ

是貞のみこの家の哥合

のうた　読人しらす

秋なれは山とよむまて鳴鹿に

我おとらめやひとりぬる夜は

題しらす　　つらゆき

秋の野にみたれてさける花の色の
ちくさに物を思ふころかな
　　みつね

ひとりして物をおもへは秋の田の
いなはのそよといふ人のなき
　　ふかやふ

人を思ふ心はかりにあらねとも雲
ゐにのみもなきわたるかな
　　忠岑

秋風にかきなすことの声にさへ
はかなく人の恋しかるらん
　　つらゆき

まこもかる淀のさは水あめふれは

つねよりもことにまつかせは
やまとにたてまつりける
しらす
さくぬまはよしのゝ山のさくら花
へつゝま関のるをしらめ春
やまたかみかすみしこゝろのたか
ひらなへ人の河よ人のせきはゝ

やうそいとゝ雲ゐもうかへつ
うるゝ紀
露なから折てかさゝむ菊の花
おいせぬ秋のひさしかるへく
題しらす　極男
我宿のくるゝ山のさくらゝめ
まちつゝもあさき心は

むねをかの大より

冬河のうへはこほれる我なれや
下になかれてこひわたるらん

忠岑

風ふけはみねにわかるゝ白雲の
たえてつれなき君か心か

友則

宵ゝにぬきて我ぬるかり衣
かけて思はぬ時のまもなし

東路のさやの中山中ゝに
何しか人を思ひ初けん

しきたへの枕の下に海はあれと
人をみるめはおひすそありける

年をへてきえぬおもひはありなから

よるのたまをさくれはなかりけり

つゝし

秋遠きそこたゝ山路にあさねて
まよつゝあしたかれかたかな
紅のいろにそつゝし間にさし
波のまにまにのまにまにの花
白玉とみえしつゝしは年をへて

かくはかりあふたちつるあはかな

ミつ

夜すから行かふ人にみちかへて
秋わかれなるとめぬつゆかな

たゝね

門ふ見ゆる山路はつゆとえ雲の
なをそえて つきもみえ君か心つ

いまはとゆくをいとあはれと思ひけれと
まつしけれはするわさもなかりけり
思ひわひて
ねむころにあひかたらひける友たちのもとに
かう〳〵いまはとてまかるを
なにこともいさゝかなることも
えせてつかはすこと

とかきておくに
手をおりてあひみしことをかそふれは
とをといひつゝよつはへにけり
かの友たちこれをみていとあはれとおもひて
よるの物まておくりてよめる
としたにも
とをとてよつはへにけるをいくたひきみをたのみきぬらん

たゞ百とせもちかき物を

えつね

君をのみ思ひねにねし夢なれは

[illegible]

[illegible]

春道つらき　忠岑

梓弓ひけはもとすゑわかかたに

よみ人　よるこそまされ恋の心は

みつね

秋の夜は露こそことにさむからし

あみを限とかゝるくもの

見し人の遠ざかりゆく

あまくもそらにも年しなきかれ

ぬかやま

今日さへやたのまれぬなかのなか

たのめしことそ命なりける

躬恒

たのめつゝあはて年ふるいつはりに
こりぬ心を人はしらなむ

友則

命やは何そは露のあたものを
あふにしかへは惜からなくに

古今和歌集巻第十三

恋歌三

やよひのついたちよりしのひに
人にものらいひてのちに雨のそほ
ふりけるによみてつかはし
ける

在原業平朝臣

おきもせすねもせてよるをあかしては

春のものとてなかめくらしつ

業平(朝臣)の家に侍りける女のもとに
よみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれつれのなかめにまさる涙河
袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりてかへしに
よめる

なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひつらめ涙河
身さへなかるときかはたのまむ

題しらす　よみ人しらす

よるへなみ身をこそとほくへたてつれ
心は君かかけとなりにき

いたつらに行てはきぬるものゆへに

見まくほしさにいさなはれつゝ
あはぬ夜のふる白雪とつもりなは
我さへともにけぬへきものを
此哥はある人のいはく柿本
人丸か歌なりと

なりひらの朝臣
秋の野にさゝわけし朝の袖よりも
あはてこし夜そひちまさりける

小野小町
みるめなきわか身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆくくる

源宗于朝臣
あはすしてこよひあけなは春の日の
なかくや人をつらしとおもはむ

みふのたゝみね

有明のつれなくみえしわかれより
暁はかりうきものはなし

ありはらのもとかた

逢ことのなきさにしよる浪なれは
恨みてのみそ立かへりける

よみ人しらす

兼てより風にさきたつ浪なれや
逢事なきにまたき立らむ

たゝみね

陸奥にありといふなる名とり川
なき名とりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまたきなき名のたつた川

まつとてや山のかひなかりける
元方
人しれぬ神をあらはれかけてあれしを
返しし
今さらにあふともたえし
よみ人しらす
きかなやましみてなき名のたつらん
人をかるみよるをしのひて

ひかし山きのこにすみ侍し
つれつれにおもひかけすかれ
みたうちつゝあさのかせのかせ
おもしろえてさまさまの
くもまちのおしあはせたまひた
ひかりさかえあはれにおもへは
つゐにしもかゝやけみえていたし
ものかたりしけるたはふれに

あはてのみかへりて
よみてやりける
なりひらの朝臣
人しれぬ我か通ひちのせきもりは
よひよひことにうちもねなゝむ
しのふれと
恋しき時は足引の
山より月のいてゝこそくれ
讀人不知
恋ゝて稀に今宵そ逢坂の
ゆふつけ鳥はなかすもあらなむ
小野小町
秋の夜も名のみなりけりあふといへは
ことそともなくあけぬるものを

九條内大臣

おしこめて[illegible]
あ[illegible]秋のあはれに
[illegible]の

さつきの[illegible]明かたに
[illegible]夜[illegible]
藤原國綱朝臣

ゆめとて今は[illegible]
[illegible]思ひ[illegible]
寛平御時きさいの宮の
歌合歌　[illegible]の朝臣
わかれて[illegible]
[illegible]
題しらす歌　[illegible]

[illegible]山

[illegible]初つら[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]君の名[illegible]

[illegible]人[illegible]

大江千里

[illegible]

[illegible]悲[illegible]

[illegible]業平朝臣[illegible]

[illegible]

[illegible]

業平朝臣の[illegible]

心もとなくてまちをれはあけは
なれてしはしあるに
女のもとよりことはゝなくて
てかくなむいひおこせたりける
女のもとよりことはゝなくて
よみ人しらぬ
君やこし我やゆきけむおもほえす
夢かうつゝかねてかさめてか
男　いといたうなきてよめる
かきくらす心の闇にまとひにき
夢うつゝとは世人さためよ
とよみてやりて狩にいてぬ
野にありけと心はそらにて今宵た
にとおもふに

小夜更てあかつきの月影に
わかれし君をいかにみるらん
君か為し神わかれたゝし雅楽頭
なかとしみなおもひさとしらし
あとつゆきの林末わかれ
いうにせしとういつまてあるゝ
青柳の川瀬の音をきくらし

もし
涙の露にかゝしたもとは思
露しくはさてはわかれのちらん
ゆきまの夜名こそみえ
さつきの花
おもてさかりさもさく春嵐
かゆみ心の林をぬきけり
たちまちのきみたつみち

あひしれりける女のもとよりおこ
せたりける
読人しらす
思ふとちひとりひとりかこひしなは
誰によそへてふちころもきむ
返し　たちはなのきよき
泣こふる涙に袖のそほちなは
ぬきかへかてらよるこそはきめ
題しらす　小町
現にはさもこそあらめ夢にさへ
人めをもると見るかわひしさ
限なき思ひのまゝによるもこむ
ゆめちをさへに人はとかめし
夢路にはあしもやすめすかよへとも

致よ人の名月をみるの

よみ人しらす

かりくるたゝめつきのたいまつも

けしきあつくえいわかけね

勝津まのまやきの白妙うし

へめつみのきなとめて

寛平御時きさいの宮の

歌合の歌　　紀友則

紅のやまはしうくれぬれの

さらて雨もちくちりし雲

是しつゝつは

冬のはしは世をいかとおもひつゝ哉

衣くさ雨のくもそにいつ

ゆくの袖はかく初若の夜かりねの
さはくよこそ名もしにせやや
よみ人しらす
山しなのおとはの山のおとにたに
人のしるへく我恋めかも
此哥ある人あふみのうねめ
のとなん申

清原ふかやふ
みつしほの流ひるまをあひかたみ
みるめの浦によるをこそまて
平貞文
白川のしらすともいはし底きよみ
流てよゝにすまむとおもへは
こしのかき

下にのみこふれはくるし玉のをの
絶てみたれぬ人なとかめそ
雨遠かりし君はいつらくはありての
山櫻のしるきつゝぬへし
よみ人しらす
おほくろいき秋わすれしみおもひき萬
よ我身うへてはいて見さめ部し

平貞文
梅あるゝのきへくとあさ遠か
のせこいあへとこしつゝか
よみ人しらす
門あふさはうつゝしけるわ
袖よりなさぬつゝ世
浅ちかたる人のつゝ柳かな

乃人丸のおもかけ
池にうつる山のおもかけしるしゐの水かゝみ
かゝとゝめまとにあかす
今宵の月も玉のかゝみの名のたかき
吉野の河の流はやくせの
村雲のたつみの秋の名今さらに
月の光さらにあかゝや

君ならて秋のはなよりなにをかも
野にも山にもたちみちて
侍従
さりとてはなをあたにちるとおもふ
ちるをおしめは雲ゐにまて

古今和歌集巻第十四

恋歌四

題しらす　　読人しらす

陸奥のあさかのぬまの花かつみ
かつ見る人に恋やわたらむ

あひ見すハ恋しきこともなからまし
　　音にそ人をきくへかりける

つらゆき

いそのかみふるの中道なか〳〵に

見すはこひしとおもはましやは

藤原たゝゆき

君といへはみまれみすまれふしのねのめつらしけなくもゆるわかこひ

伊勢

夢にたにみゆとはみえしあさなあさな我面影にはつる身なれは

よみ人しらす

石まゆく水の白浪たちかへりかくこそはみめあかすもあるかな

伊勢のあまのあさな夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

友則

春霞たなひく山の桜花

題しらす

さむしろに衣かたしきこよひもや
我をまつらんうちのはしひめ
又はうちのたまひめ

君やこむ我やゆかむのいさよひに
まきの板戸もさゝすねにけり

そせいほうし

今こむといひしはかりに長月の
ありあけの月を待出つるかな

よみ人しらす

月夜よし夜よしと人に告やらは
こてふにゝたりまたすしもあらす

君こすは閨へもいらしこ紫
わかもとゆひに霜はおくとも

宮城のゝもとあらの小萩露をおもみ
風をまつこと君をこそまて
あな恋し今も見てしか山かつの
かきほにさける山となてしこ
津の国のなには思はす山城の
とはにあひ見んことをのみこそ
つらゆき

しきしまのやまとにはあらぬから衣
ころもへすして逢よしもかな
ふかやふ
恋しとはたか名つけゝんことならん
しぬとそたゝにいふへかりける
よみ人しらす
みよしのゝ大川のへの藤なみの

なみにおもはゝ我恋めやは

かく恋むものとはわれもおもひにき
心のうらそまさしかりける

天の原ふみとゝろかしなる神も
おもふなかをはさくるものかは

梓弓ひきのゝつゝらすゑつゐに
わか思ふ人にことのしけゝむ

此哥はある人あめの御かとの
あふみのうねめにたまひけると
なむ

夏引の手ひきのいとをくりかへし
ことしけくともたえむと思ふな
此歌はかへしによみてたてまつりけるとなむ

題しらす

里人のとは夜のしるしきくやとし
かきの君たちはあはせつめやは
藤原敏行の朝臣の業平
のあそんの家なりける女を
あひしりてふみつかはせり
ことばにいままうでくあめのふりけるを
なむみわづらひ侍と云
けるを聞てかの女に

かはりてよめる
在原業平朝臣
かずかずに思ひおもはずとひがたみ
身をしる雨はふりぞ増れる
あるじの女のかはりに朝臣など
うたよみのあはれなるにことよ
てよみてつかはしける

よみ人しらす

大ぬさの引手あまたになりぬれは
おもへとえこそたのまさりけれ
返し　なりひらの朝臣
おほぬさと名にこそたてれなかれても
つゐによるせはありてふものを
題しらす　よみ人しらす

すまのあまの塩やく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬ心のうれしけもなし
たか里によかれをしてかほとゝきす
たゝこゝにしもねたるこゑする
いて人はことのみそよき月草の

うつし心はいろことにして
偽のなき世なりせはいかはかり
人のことのはうれしからまし
偽とおもふものから今さらに
たかまことをかわれはたのまむ
素性法師
秋風に山の木のはのうつろへは
人のこゝろもいかゝとそおもふ
寛平御時きさいの宮の
歌合の歌
友則
蝉の声きけはかなしな夏衣
うすくや人のならむと思へは
題しらす
よみ人しらす
空蝉のよの人ことのしけゝれは

三をのへかまぬつゝあり
あそてゝゆかをえ中ハ大納言
ちかしこ源の三らみや
こゑわするとかさねしろつる
うつはしよりもにまろ以こ
まゝまよ維きうる田る郭公
人のあきにまうしこしきゝ

たえくにはあまりのはなのおとみゆ
へあらやへのかさゝん
洲のはうちのゆきあらと
みのあつきかてう歌あり
宇治の玄ちもと人にもめと
おりはくゝかへきよあらぬ
喜撰法師

すゝかあゝつゆちやさかるらむ風
けふも山のはかなくなりにけり
　　よみ人しらず
紅の花のいろのあせぬかは
かくしてもいはれぬもの屋
　　河原左大臣
みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに
乱初にし我ならなくに
　　よみ人しらず
あきよろこひしさまさか秋はね
たなかりけりちるもろゝかれ
ちれつろうつるいろよりまさりける
心の秋の紅葉ならねは
　　小野小町

遥乃也乎里の志らへおちぬ
うらみえとのさへのこゝろめん
さえいさのまきる
墨ひ乃うちとしおもはゝ岩ねにも
めまちかへねまかいさかはそ
貫之
色もかはらぬ見るめしまつ

うつろひとさためなき世におもへはかり
読人しらす
めつらしき人をみむとやしかもせぬ
秋萩のしたはの露のとしめ
こまつとの春雨ぞあはれなる
あきの日とおもはしつらそめぬ
堀川のたのみしかひもなくて

おなし人にや恋わたりなん

伊勢

わたつみとあれにし床を今更に
はらはゝ袖やあはとうきなん

つらゆき

いにしへに猶立かへるこゝろかな
恋しきことに物わすれせて

人をしのひにあひしりてあ
ひかたくありけれはその家の
あたりをまかりありきける
おりにかりのなくをきゝて
よみてつかはしける

大伴のくろぬし

思ひ出て恋しき時は初雁の

鳴てわたると人しらめや
右のおほいまうちきみすまず
なりにけれはかのむかしおこせたりける
ふみともをとりあ
つめて返すとてよみておくりける
典侍藤原よるかの朝臣
たのめこしことのは今はかへしてむ
我身ふるれはおき所なし
返し　近院の右のおほいまうちきみ
今はとてかへすことのはひろひおきて
おのかものからかたみとやみむ
題しらす　よるかの朝臣
玉ほこのみちはつねにもまとはなむ
人をとふともわれかと思はむ

よみ人しらす

まてといはゝねてもゆかなんしひてゆく
駒のあしおれまへのたなはし

中納言源のゝほるの朝臣の
あふみのすけに侍ける時
よみてやれりける
閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらはこそ
君かゆきゝをなくなくも
見め
伊勢

ふるさとにあらぬものから我ために
人の心のあれてみゆらん
寵

山かつのかきほにはへるあをつゝら

人をそねむ事をつゝしむへし

さか井乃ひとさね

大雲を遠つきく人の形えうかし
かゝるよしとに消めくるへし

よみ人しらす

逢みすゝみ形えし外ハおもふまゝに
みよしのゝおくの山おくあり

かやうのまゝきさき人の娘に
いとものあはれとさりて
いふはあはれなるおやのまこと
なさけ急にうとそも
聞あはれぬさむきてつゝき
うの後もあらうへをとて
むかしうの

年ころの形見とてとゝめける
物にうつくしく成けるを
見しる人よみける
形見こそいまはあたなれこれなくは
忘るゝ時もあらまし物を

古今和歌集巻第十五

恋歌五

五条のきさいの宮のにしのたいに
すみける人にほいにはあらて
ものいひわたりけるをむ月の
十日あまりになむほかへ
かくれにけるあり所はきゝけれと

きゝけれとえものもいはて又の年
のはる梅の花さかりに月の
おもしろかりける夜こそをこひて
かのにしのたいにいきて月のかた
ふくまてあはらなるいたしきに
ふせりてよめる
業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

秋きぬと目にはさやかに見えねとも
風のおとにそおとろかれぬる
藤原敏行朝臣

秋はきぬいまやまかきのきりきりす
よなよななかむ風のさむさに
藤原忠房朝臣

[illegible]

るとなしにみなれそめけむ

凡河内みつね

わかことく我を思はむ人もかな
さてもやうきと世を心みむ

元方

久かたの天津空にもすまなくに
人はよそにそ思ふへらなる

よみ人しらす

みてもまたまたも見まくのほしけれは
なるゝを人はいとふへらなり

紀友則

雲もなくなきたるあさの我なれや
いとはれてのみ世をはへぬらむ

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれは
わすられぬらむ

こゝろぬるぬかとゝろへかへし
うきなめのさかしら流らうらむかな
かつらきのこゝにもあはぬゆめ
伊勢
管通にあはせてかへしてあかぬ秋袖の
やまあけぬるうかはまし
読人しらす
次
秋ありてまく白露はおきしめら
秋のたれの志くはまつ
次すのあふみの海の橋や衣かへしつらむ
まつおもあき屋君ここをまつぬ
山城乃宇治のまてうこしかくはたま
ゝあ人のあ秋はしはあゝい
あひたれはあれこゝろにいまゝかせゝ河

おもふことかなふなる鐘

暁の鴫のはねかきも羽かき
君かこぬよは我そかすかく

まつうへたかやか風の
かとにはまし人の関こえてこそ

わかそてにまたき時雨のふりぬるは
君か心に秋やきぬらん

山の井のあさき心も思はぬを
かけはかりのみ人のみゆらん

逢事はたまのをはかり名の
いとかくうらしかも瀬ゝ

ひとまとし昔の露のあさはかなき草
夢さへよ露なれはきえぬ
夢にもあはぬかくしつゝ

秋やくるまぬ人やまつらし
見えきは流し
唐衣夢ならしかは逢かくさ
思ひぬ中にうきとつらさ
さえのかつら
なるゝ乃ミ袖のうらやみ乃つきせぬ
人を思ふ乃あまりかなしき

僧正遍昭
秋やとは首しておもふものからぬ
申まおもふ人をまつとゝ思ゆ
今こんと云しばかり別し朝より
かくしつゝミ涙乃まさる
よそ人の
こひやとは思ひのうらへくらしの

おくやまのたちまよひて
いましもとほまつかけのかまの
夜はかすみてあたのせきあ
今かへしとかしまゆふたつ
まつかくれの風にしやまかう
月夜のは許ぬ今ましまかぬいまかせ
雨にけぬ花まつかけ

うつゝにも秋田刈ませてなくなく
今朝きく声のなかは鳴ぬ
こぬ人を待夕くれのあきの風も
侍つゝはぬまにいつまてこれ
さりとて風はきそにて待人の
まつかせたつきゆきもまち
かつらきの家君

住乃江のまつほと久になりぬれは
あしたつ乃ねになかぬ日はなし
中平朝臣あひしりて侍りけるを
かれかたになりにけれは
ちゝかやまとのかみに侍けるもとへ
まかるとてよみてつかはし
ける
伊勢

みわの山いかにまちみん年ふとも
たつぬる人もあらしと思へは
題しらす　雲林院のみこ
吹まよふ野風をさむみ秋はきの
うつりもゆくか人の心の
小野小町
今はとて我身しくれにふりぬれは

あきのさかいへかうにてよめる

題しらず　小式部内侍

人をまつ心にあまりあはれはつれ

うらやましくもちるこそあれ

あかなくにみ朝臣のあはれつ

はるのあけほのすゝきうちに

こよひあけなはしのあはれ

たゝはいてゆきかふ人もかな

のこしきをも誰とつまみて

あはれ雲のうへにも人のかけはかう

こたへしめよふくゆふくれ

題しらず　葉室朝臣

ゆふくれの雲にのみてぬれけれ

秋霧の山の雲にはなきみなり

是しの　うけ乃まの大臣

唐衣きそうにいまつれし袖
かけ乃やハ恋しと思し
さし乃かも

秋門にそうかきてそこかふる
人のこころの雲にかゝれし
源家長朝臣

傍生えしおかけ人乃みえ旅
秋よりまさり乃もみち葉さら
さ此うこおへまさりへむ
あしきうす傍き人乃とそ
心ちなにかえて乃ちよ
みつうきわも傍えつうきら
無八勘

さてや山櫻、みるからかはし
つらぬきまつらしそ
あらしもかゝれ人のやどに
くれまさりし風吹へかに
やさしめちみ吹かみなさし
てつくみぞやかまれ
こまちうあね

時まちてさかりあはれし
へうさしうちかたらもき
ゆかしたか月たゞらみまち
きまさむ首にし里野中へ見もきと
まおそくさめまあれ伊勢
みなつかのさかへ思ひて
すくててきしきかいきかゆ

是しを　きのとものり

水の泡の消てうき身といひなから
流て猶もたのまるゝかな

よみ人しらす

みなせ河ありてゆく水なくはこそ
つゐにわか身をたえぬと思はめ

みつね

よしの河よしや人こそつらからめ
はやくいひてしことはわすれし

よみ人しらす

世中の人の心は花染の
うつろひやすき色にそありける

心こそうたてにくけれそめさらは
移ろふこともをしからましや

こまち

いろみえてうつろふものは世中の
人の心の花にそありける

よみ人しらす

我のみや世をうくひすとなきわひん
人の心の花とちりなは

そせい法師

思ふともかれなん人をいかゝせん
あかすちりぬる花とこそみめ

よみ人しらす

今はとて君かかれなは我宿の
花をはひとりみてやしのはん

むねゆき朝臣

忘草かれもやするとつれもなき
人の

人の心にしもはおかなむ
寛平御時屏風に哥かゝ
せ給ひける時よみてかきける
そせい法し
忘草何をかたねと思ひしは
つれなき人の心なりけり
題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに
何をうしとか人のかるらん
きのつらゆき
はつ雁のなきこそわたれ世中の
人の心のあきしうけれは
よみ人しらす
あはれともうしとももの思ふ時

なとかなみたのいとなかるらむ
みをうしと思ふにきえぬものなれは
かくてもへぬる世にこそありけれ
典侍藤原直子朝臣
蜑のかるもにすむ虫のわれからと
ねをこそなかめ世をはうらみし
いなは

あひみぬもうきもわかみの唐衣
思ひしらすもとくるひもかな
寛平御時きさいの宮の
歌合の歌
すかのゝたゝをむ
つれなきをいまはこひしと思へとも
心よはくもおつるなみたか

題しらす　伊勢

人しれすたえなましかは
わひつゝもなき名そとたに
いはまし物を

それをたに思ふ事とて我やとを
見きとないひそ人のきかくに

逢事のもはらたえぬる時にこそ
人の恋しきこともしりけれ

わひはつる時さへ物のかなしきは
いつこをしのふなみたなるらん

藤原おきかせ

恨みてもなきてもいはむかたそなき
鏡にみゆる影ならすして

よみ人しらす

夕されハ人まちいとこそ打ちらし
おもふらぬあめとおもふ海松かう
和田津みの外ハさハ波立つ
あまの原山てむらさきつゆ
うらかなしあはれしらし
人のかなしさそふはま
おもふ海のまつやまなるいたつらハ

見わたせは月のうへなるあきの
あまのはら雲井かなして
ふるさとの秋の夜の
しらつゆはおもしろき
心のあらはおもひ
秋の日ハおもひ
あまのはるの

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれ
わか身むなしくなりぬと思へは

平さたふん

秋風の吹うらかへすくすの葉の
うらみてもなをうらめしきかな

よみ人しらす

あきといへはよそにそきゝしあた人の
我をふるせる名にこそ有けれ

わすらるゝ身をうち橋の中たえて
人もかよはぬ年そへにける

又はこなたかなたに人も
かよはす

坂上是則

倉月かはまるあやしかりけるを
いひおこせまにまかりへりけれは
とものり
うきなからけぬるあはともなりななむ
流れてとたにたのまれぬ身は
よみ人しらす
なかれては妹背の山のなかにおつる
よしの河のよしやよの中

古今和歌集巻第十六
哀傷哥
いもうとの身まかりける
時よみける
小野たかむらの朝臣
なく涙雨とふらなんわたり川
水まさりなはかへりくるかに

あきのかはしはなかりとはいまそかし
さゝなみや白川のなかれこそ
ひさまねのよりまさりけれ

寂蓮法し

ちるはなのちりてつもらは白河の
君か世まちみるにまかせて
堀川のなかれにはましはなは

ちまちみかきのかもしにもみち
あくのかまの山はたかゝめて
まかれのちにしよみかえ

僧都勝延

雪螢

きえやかりつきしのたりつしあけの
あくのあまの山きみかたちあき
かりしつりかれかま

深草の野辺の桜し心あらハ
ことしハかりハすみそめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける
時によみてかの家
につかはしける

きのとものり

ねても見ゆねても見えけり大方ハ
空蝉の世ハ夢にそありける

あひしれりける人のみまかりにける時によめる

きのつらゆき

夢とこそいふへかりけれ世中に
うつゝある物と思ひけるかな

あひしれりける人の身まか

[illegible]

[illegible]

[illegible]

別[illegible]

[illegible]原[illegible]

[illegible]侍[illegible]人々[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]

同院

[illegible]

[illegible]水の[illegible]

紀友則かみまかりにける時よめる

つらゆき

あすしらぬわかみとおもへとくれぬまの
けふは人こそかなしかりけれ

たゝみね

時しもあれ秋やは人のわかるへき
あるをみるたにこひしきものを

はゝかおもひにてよめる

凡河内躬恒

神無月しくれにぬるゝもみちはゝ
たゝわひ人の袂なりけり

ちゝかおもひにてよめる

たゝみね

ふち衣はつるゝいとはわひ人の

涙の玉のをとそなりける

思ひに侍りける年の秋山寺
へまかりける道にてよめる

つらゆき

朝露のおくての山田かりそめに
うき世の中をおもひぬるかな

おもひに侍りける人をとふら
ひにまかりてよめる

たゝみね

墨染の君かたもとは雲なれや
たえす涙の雨とのみふる

女のおやのおもひにて山寺に
侍りけるをある人のとふらひ
つかはせりけれは

よめる　よみ人しらす
足引の山へに今はすみ染の
衣のそてはひる時もなし
諒闇のとし池のほとりの花を
見てよめる　たかむらの朝臣
水の面にしつく花の色さやかにも
君かみかけのおもほゆるかな

深草の御門の御国忌の日
よめる　文屋やすひて
草ふかき霞の谷にかけかくし
てる日のくれしけふにやはあらぬ
深草の御門の御時に蔵人
の頭にてよるひるなれ
つかうまつりけるを諒闇に

けれはさらに世にもましらすして
ひえの山にのほりて
かしらおろしてけり
その又のとしみな人御ふく
ぬきてあるはかうふりたまはり
なとよろこひけるをき
きてよめる　僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなり
こけのたもとよかはきたにせよ

河原のおほいまうちきみの
身まかりての秋かの家のほ
とりをまかりけるに紅葉の
いろまたふかくもならさりける
をみてかの家によみて

こしかたをまかれ

白河院の右のおほいまうちきみ

打つけにしくしもみちの錦は
ぬれしあきのやとはみなおもへとも

藤原のあそん朝臣
まろうとみえの年の夏の
のあきはまたおもきてよめる

貫之

郭公はきゝおもしろき聲よりもなとあなたに
君はまたしらぬ時鳥まちわひて
桜ちる人のあとにもとめておもひやる
や花咲ぬときにたのみの
文ある人のうゑたるにまかれ
うのはなのみちあるもとめ

紀もちゆき

はなよりも人こそあたになりにけれ
いつれをさきにこひむとかみし

あるしみまかりにける人の
家の梅花をみてよめる
つらゆき

いろもかも昔のこさににほへとも
うゑけん人のかけそこひしき

河原のおほいまうちきみの
身まかりての後かの家に
まかりてありけるにしほかまと
いふ所のさまをつくれりける
をみてよめる

君まさて煙たえにししほかまの

浦さひしくも見えわたる哉
藤原のとしもとの朝臣の右近
中将にてすみ侍けるさうし
のみまかりて後人もすまなり
にけるを秋の夜ふけて
ものよりまうてくるついてに
見いれけれはもとあ

りしせんさいもいとしけく
あれたりけるを見てはやく
そこに侍けれはむかし
をおもひやりて　よみける
みはるのありすけ

君のうへし一村すゝき虫のねの
しけき野へともなりにける哉

是たうの御よろちか侍を
人ときこはよあつめきえ寿として
さ御きもかうてかくれ
まちくにおみへかれつきち
ゑしつめと
きとあいとの御城ゑくさ之あ
えわも成のあちなまいつきち

是しもの　およ木の次
あくさいへのやとにかなつて郎公
かすてねまのえあつとつき南
ほのみとむさきさん白雲の
たいのとやくゆう拂
式部のみの御院の五
のえいにゆるみまういうきち

おほくろくありて女み
この仙國うるまにきに時行
かの御國の宮にみまかりけるの
うらみていにしにあまりけり
ひつ方たゝのまきにかきこうして
えもいはでみちまて淡路
かくかゝりつ方たゝのまかり

かくてはかへりけむかしは
山のみかどあるとてはみや
男女の國のうらしきを
下女にはそうまやまひきて
しとよるしのきまとこしめ
かくて見國のうらにまかり
よみ人きこへ

聲をだにきかで別るゝ玉よりも
なきとこにねむ君ぞかなしき
やまひにわづらひ侍りける秋
心ちのたのもしげなくおぼえ
ければよみて人のもとにつか
はしける
大江千里

もみぢ葉を風にまかせて見るより
もはかなき物は命なりけり
身まかりなむとてよめる
藤原これもと
露をなどあだなる物と思ひけむ
わが身も草におかぬばかりを
やまひしてよわくなりにける時よめる

業平朝臣

つゐにゆく道とはかねて聞しかと
きのふけふとは思はさりしを

かひのくにゝあひしりて侍りける
人とふらはんとてまかりけるを
みちなかにてにはかにやまひをし
ていまいまとなりにけれは

よみて京にもて
まかりて母にみせよと
いひて人につけ侍りける

哥　在原滋春

かりそめのゆきかひちとそ思ひこし
今はかきりのかとてなりけり

古今倭歌集巻第十七

雑哥上

題しらす　よみ人しらす

わかうへに露そおくなる天の河
とわたる舟のかいのしつくか

思ふとちまとゐせる夜は唐錦
たゝまくをしき物にそありける

うらしまがけふまつ風の唐衣
たもとにたゞしほそとる海ら
恨ある君がたゞなまとかゝるみえし
晴しこそぬるゝものまゝ有るまき
あらへのあさ浅茅をこえしの
かくまもはかなくみのあらう
悲の心とあしとのへにもしみて

なはみるくあまれともなくら
絶のかとをみれもて侍る
人乃うへのこゝろねさへかくらと
てよみてやつかはしける
おもひみ給ふに
もとつれ乃つろへ行といはめとも行
野あらあまのみるめなからん

大納言藤原のくにつねの卿
宰相より中納言になりける
時そめぬうへのきぬのあを
ゆかりをきるとて　よみ侍る

内侍の右大まうち公
色しもと人やみるらん昔より
ふかき心にそめてしものを

すみのみかとにまいりて宮
はしの人々よせよくすみ神と
みところに韻侍りきを
まおほき御かうふりたまはりたる
まれにきしよるにたちに
つらいとてよみてつかふ
しきぶ

ゆきのしまみて

見えつるやまとは伏見神
ろみしかには花咲けり
二条のきさきの宮の東宮
のみやすん所と申ける時
りかはほとりの庭にうて給
ひまうけ日なあれ

業平朝臣

大原やをしほの山もけふこそは
神代の事も思ひいつらめ

五節舞姫を見てよめる

よしみねのむねさた

天津風雲の通路吹とちよ
乙女のすかたしはしととめむ

五節のあしたなかくらみし
王のかちたまはりけるを
たうあれとそらいて渡る
河原左の大まうち君
ぬしやほとへて白玉しるかしに
あらはおもへてや義と思え
寛平御時りう人のきう

内侍まゐるかみのことしこの地
おもひてきこえしのたちやゑ
御つほねにかうすえのたまはし
とみにはまゐるゆつりたる
つきさまおほえてくらしつ
てかめけかまへにまゐて
さしかくさしきの御みまいは

つかひのかへりきてさなんありつる
といひけれはくら人のなかに
おくりける　としゆきの朝臣
たまたれのこかめやいつらこよろきの
磯のなみわけおきにいてにけり
女とものみてわらひけれは
よめる
けんけい法し

かたちこそみ山かくれの朽木なれ
心は花になさはなりなん
方たかへに人の家にまかれりける
時にあるしの衣をきせたりけるを
あしたにかへすとてよめる
きのとものり
せみのはのよるの衣はうすけれと

うつりかこくもにほひぬるかな

題しらす　よみ人しらす

おそくいつる月にも有かなあしひきの

山のあなたもおしむへらなり

我心なくさめかねつさらしなや

をはすて山にてる月をみて

なりひらの朝臣

大かたは月をもめてしこれそこの

つもれは人のおいとなるもの

月面白とて凡河内躬恒か

まうてきたりけるによめる　紀貫之

かつ見れとうとくもあるかな月影の

いたらぬ里もあらしとおもへは

池に月のみえけるをよめる

二なき物とおもひしを水底に
山のはならて出る月かけ
題しらす　よみ人しらす
天川雲のみをにてはやけれは
光とゝめす月そなかるゝ
あかすして月のかくるゝ山もとは
あなたおもてそこひしかりける

是たかのみこのかりしける
ともにまかりてやとりにかへりて
よひとよさけをのみ物かたりし
けるに十一日の
月もかくれなむとしけるおりに
みこゑひてうちへいりなむとし
けれはよみ侍ける

葉室頼孝

あのはらはまこゝに月のかけさしつ
山のはしまてつねをしたる南
男将の御門の晴まに新院
侍まゐりつゝ見ゆる
たゝあやめちりまた花て
新院をかくれしとさためられ

けみしとやまにわかよめる
いつま藤原信
大雲てつ川清き
すまうせとまたかけに
是しつのおきつらし
その袖のかけまくもかしこき
よくかしこさるらん

浮ふし文乃野守は忘られぬものを
もみぢハしらぬ人に
一すしへ人乃かたなまつ宮やしろにし
をかしかりしあそびありけり
今まてのうまれしゝいとに山
さうかうしとしあそびし物
世ゝに多くもぬるかもを律乃雲

おもひえしかまとめんと惣ぬる
さかきの成ハ宮乃前に寄れたるかな
ちかくいとらんのうろうかきし
かまあさきの竹林の下ちす松
こ地はなめんとうらへ
よいくらかさハ乃わかまつかな
ちかしいてまへ

かうたのさまをもしり

ことのこゝろをえたらむひとは

おほそらの月をみるかことくに

いにしへをあふきていまをこひさらめかも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今和哥集巻第一 (?)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さうしつきおもひて親王
鏡山いさたちよりてみてゆかん
年へぬる身はおいやしぬると
此哥はある人のいはく大伴
のくろぬしかなり
なりひらの朝臣のはゝのみこ
なかをかにすみ侍ける時に

業平宮つかへすとて時ゝも
えまかりとふらはす侍けれは
はゝのみこのもとよりとみの
事とて文をもてまうてきたり
あけてみれはことはゝなくて
ありけるうた
老ぬれはさらぬ別もありといへは

侍よし春やかりし君かな
也し　ありはら朝臣
世にさかぬまきれのおもしろ
ちよしかしおもくのみかゝめ
寛平御時きさいの宮の歌合歌
わかもとかみのせりやる
白雲の尾上にかゝりしきおりのうら山

こゝろしきをかしけは春かたのみや
かけ御時のさくらのさかりに
みそかにことしはかしこまれ
あはれてかくはまゐりつゝ
そらにつゝうゆるつまれ
よしひらの朝臣
かえりてこゝを我かたをあめつけ

君をはしめてあはれ海地も

見しもの　よそへまさりて

ちとせふるもまつ[illegible]本の[illegible]

あかねと思ふ年のへぬるえ

外みそしきしら住吉の

岸のひめ松よろつ

住吉の岸のひめ松へあらむ

幾代へしとしら海[illegible]

梓弓やはた海川[illegible]住の

よはひ　よのうへて[illegible]

此[illegible]の[illegible]

の人まろの[illegible]

かくつ[illegible]やつくえ高砂の

尾上のたかまつかへ[illegible]

藤原おきかせ

誰をかもしる人にせむたかさこの
松もむかしのともならなくに

和田津海の沖つ塩あひにうかふあわの
消ぬものからよる方もなし

わたつ海のかさしにさせる白妙の
波もてゆへるあはち嶋山

わたの原よせくる浪のしはしはも
見まくほしきは玉津嶋かも

なにはかた塩みちくらしあま衣
たみのゝ嶋にたつ鳴わたる

貫之かいつみの国に侍ける
時にやまとよりこえまうて

ききてよみてつかはしける

藤原たゝふさ

君をおもひおきつのはまに鳴たつの
尋ねくれはそありとたにきく

ぬし　　つらゆき

おき津波たかしのはまの濱松の
名にこそ君をまちわたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

難波かたおふる玉もをかりそめの
あまとそ我はなりぬへらなる

あひしれりける人の住よしに
まうてけるによみてつかはしける

みふの
たゝみね

住よしとあまはつくともなかゐすな

人忘草おひてけり
おほく人かよひし時たえみて
さえみえて雨にぬれてかへる
貫之
雨ふりけるたちのさえ給ひて
おほせにてくちなしにぬれぬ
法皇の御にておはしましてた

つらきめにあはせてこと
こそありけれよくかなしく
あかなくにかたかなし
よそにかくあはぬことの
中将のきみは若菜のやせ
ろかつくへかりし
めてはうけるり日法皇御

流しにおもはしゆしたかまき
まゆみかのほとにかへりかなし
ゆきとしきぬをかさねにみゆ
あゆみきて

伊勢
みる人もなき山さとの桜花
ほかのちりなんのちそさかまし

かくさそにみやりてよめる
素性法師
都まてみやれはやなきさくらを
こきませて春のにしきなりける

布引の滝にてよめる
在原行平
こきちらす滝の白玉ひろひおきて

よのうき時の涙にそかる

布ひきの瀧のもとにて人々
あつまりて哥よみける時
によめる

業平朝臣

ぬきみたる人こそあるらし白玉の
まなくもちるか袖のせはきに

よし野の瀧をみてよめる

承均法師

たかためにひきてさらせる布なれや
世をへてみれととる人もなき

題しらす　神たい法師

きよ瀧の瀬々の白いとくりためて
山わけ衣おりてきましを

龍門にまうでゝ瀧のもと
にてよめる　伊勢
たちぬはぬ衣きし人もなきものを
なに山姫の布さらすらん
朱雀院の御門ぬのびきの瀧
御覧ぜんとて文月七日
の日おはしましてありける時
さふらふ人々に歌よませ給
ふによめる
たちばなのながもり
ぬしなくてさらせる布をたなばたに
わが心とや今日はかさまし
ひえの山なる音羽の瀧を見
てよめる
忠岑

おちたきつ瀧のみなかみ年積り
老にけらしなくろきすちなし
おなしたきをよめる
みつね
風吹と所もさらぬ白雲は
よをへておつる水にそ有ける
田むらの御時に女房のさふらひに
て御屏風の絵御らむしけるに
したきおちたりける所
面白き これを題にて
哥よめとさふらふ人におほせ
られけれはよめる
三条の町
思ひせく心の中のたきなれや

おつとはみれとおとのきこえぬ
屏風乃絵なる花をよめる
貫之
咲初之時より後はうちはへて
世は春なれや色のつねなる
屏風乃ゑによみあはせて
かきける

坂上是則
かりてほす山田乃稲のこきたれて
なきこそわたれ秋のうけれは

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず　　よみ人しらず

世中はなにかつねなるあすか河

きのふのふちそけふはせになる

いくよしもあらし我身をなそもかく

あまのかるもに思みたるゝ

隔の詞は嵐の朝霧を払ふ
かくかつらき山をみけり
小町　大伴黒主
志うとそのいかに志て
まゐかつかゐかたかけ業平
うたのかみ侍るまき晴遍昭
まそうのかゝるまけん人あつう

ころもの　花のかけに
都へのほりてやまたみ
ちはや我妹にわかこたえ
み屋のやまのくうこ河の
そてにあかうくあうらはいち
えつてたしやとふかへ
つときこゆるもの月にあかし

小野小町

侘ぬれは身をうき草の根をたえて
さそふ水あらはいなんとそ思ふ（えそ）
是しらぬ

あはれてふことこそうたて世中を
思ひはなれぬほたしなりけれ
よみ人しらす

あはれてふ言葉ことにおくつゆは
むかしをこふる涙なりけり

世中はゆめかうつゝかうつゝとも
ゆめともしらすありてなけれは

世中にいつら我身のありてなし
あはれとやいはむあなうとやいはむ

ちりしこそつらかれあつ[illegible]

哀とやいはむあなうとやいはん
山里は物のさひしき事こそあれ
世のうきよりは住よかりけり
これたかのみこ
白雲のたえすたなひく峯にたに
すめはすみぬる世にこそありけれ
布留のいまみち

しりにけりきゝてもいとへ世中は
浪のさはきに風そしくめる
そせい
いつくにか世をはいとはん心こそ
野にも山にもまとふへらなれ
よみ人しらす
世中はむかしよりやはうかりけん

外ならぬ山にも川のながるゝあさからう
世中はつらき山路の奥もとや
あさうの葉風の色にいでゝ
みよしのゝ山のあらしは宿かの
世のうき時の人のはうきを
世にはよそうきにて春三夜の
いかにもあの法道にかゝりて

いかなる岩ねのけしきも雨しかい
世のうきかたにさこえ
足引の山のまにまにかくれ
うき世の中をもあちらこちらにも
世の中はみなうきにしあらば奥山の
こゝろもこゝろからに雪やあらし
あさましあさましき事

その庵より別

ようかめえぬ山路へつゝぬまで、

かすみたちまよいかゝり

山のかけし茂きをへだてし

あふる 九所内まつの

あかねさし山に入日と山まてし

あをうたる時や ふる行え

ゆかしく思ひ時しもあらぬ

いつみえぬよあめ

今更は何かなき竹の人み

うたのうきかけはよきぬ

是しへ よみ人全え

よふゆきえ義をつさ人行へ

うたぬいとゝ露うちかゝ

木のしたのあまよりしもあらぬらん

そしかたハおもひぬるかな

あらぬのへたのみの

事なり

わうみかくらうに萬葉歌に

へのためにそへつあかきりて

おほみもまちあまされ侍

あまのゝるよあり

たうちみゆき御情

思ふよや都のまつはあかとちゝろ

あはのあきたゝいつせんとに

田村の御時御事にわたりて

津の国の河へくとて

こゝろよくもちゐ侍まゝしゝ宮

のうちに侍りける人につかは
しける　在原行平朝臣
わくらはにとふ人あらはすまの浦に
もしほたれつゝわふとこたへよ
左近の監とけられて侍ける
時に女のとふらひにおこせたり
ける返事によみてつかは

しける　小野春風
あまひこのおとつれしとそ今は
思ふ我か人かと身をたとる世に
つかさとけて侍ける時よめる
平さたふん
うき世にはかとさせりとも見えなくに
なとかわか身のいてかてにする

あかをそぬ命ともかなけれかしかり
うたゝねとも思ひひしに
みこのきやのたちをまちて
倩おもへは宮つかへのとも
まつひとそこけふはるを
まとこのよるは
兄やちうきよ

つゆの命きえなまかは
末の松山のなみこさし
時あまなる人のいのち
あひてもあひ見て
つゆあるこしあひ
いあきいと思ひて
清原ぬかやす

ないしあつき方にハまうしよせあまた
さいはひありける物思ひしきハ
かつらに清和の明七条の
中宮とも后とも申ける御
みつしにありてつかうまつり

伊勢

大方の甲にハかへしつる哥あはれ

究竟の哥よみにてなりつかへ
紀のつらゆきにもおとらずなり
まつりことをつかさとる申けるを
れいの事とてまゐるを
なかさきぬ所にて時さくかりに
百二十あまり六哥合まで
名をもそへきこえつゝ

よしの山　葉室朝臣

今そしる人しれぬ身をまかせ

黒髪のかなしきことのかきり

こゝろさへみえて出よはいかゝ

思ひはて恋しなはいかにかなしからむ

たのみてし人の前よ情まさる

正月はまたみつくしそてくる

うきにはたゝいふ山のはのゆ

もと咲とり雪といふよ

春さるをかのはなのうらみ

思ひをかなしみ草も

霞しとして心との

そてうつまつれなきよ

みなかくつ　よみて

忘れては夢かとぞ思ひけるや
雪ふみわけて君を見んとは
深草の里にすみ侍りて京へ
まうでくとてそこなりける
人によみておくりける
年をへてすみこし里を出ていなば
いとゞ深草野とやなりなん

返し　　　　よみ人しらず
野とならばうづらとなりて鳴をらん
かりにだにやは君はこざらん
是しの
秋の野に君かまつそのうこむしかて
うかめ火のあさと浦はこい
此哥をある人見て男ありき

うつゝにはさもこそあらめかくこそはなれ
ゆめにさへ人めをもるとみるか
かきりなきおもひのまゝによるもこむ
ゆめちをさへに人はとかめし

返し

おもひつゝぬれはや人のみえつらむ
ゆめとしりせはさめさらましを

今はとてわか身しくれにふりぬれは
ことのはさへにうつろひにけり
友たちのうへにまかりてこ
ことのはをよみてつかはしける

返し　小町

秋の夜もなのみなりけりあふといへは
ことそともなくあけぬるものを

人をとはてひさしうありけるを
りにあひうらみけれはよめる
身をすてゝゆきやしにけむ思ふより
ほかなるものは心なりけり
むねをかのおほよりかこしより
まうてきたりける時に雪の
ふりけるを見ておのか思ひは
この雪のことくなむつもれると
いひけるおりによめる
君か思ひ雪とつもらはたのまれす
春よりのちはあらしと思へは
返し　宗岳大頼
君をのみ思ひこしちの白山は
いつかは雪のきゆる時ある

さくら花今はつらしきち
紀貫之

かへるやまみし白山きらはなし
一夜に夢みきぬまよりちし
是しるし
よみ人しらす

ほさつには菩薩へおもひとつくや
ゆめみれはいとのかまましに

我庵はみわの山もと恋しくは
とふらひきませ杉たてるかと
きせん法し

我庵を都のたつみさる住
よをうち山と人はいふなり
よみ人しらす

わきしにあつあるは幾夜やとおもや

とみなん人のかとつきしなは
あつまりて出羽晴なるまたゝ
まつ人る女の羽かのきられ
きくてよみつゝいたりける
よし村の君は
院人の住所宿とまおかへり
あなたハくゝりの羽人の梅か

初めはまうて道にありの
京にやとかつて出羽晴よある

二条

人みなさいとかつてとくていかし
あるの都にうちまいりたる
是はしめ　おほし恋
世の中ハ人のきミてまかりし

ゆきとまるをそやとゝさたむる
逢坂のあらしの風はさむけれと
行末しらねは侘つゝそぬる
風のうへにありかさためぬちりの身は
ゆくゑもしらすなりぬへらなり
家をうりてよめる
伊勢
あすか河ふちにもあらぬわか宿も
せにかはりゆく物にそありける
つくしに侍ける時にまかり
かよひつゝこうちける人の
もとに京にかへりまうてきて
つかはしける
紀友則

ある里はなしことしあへるのあめの
ちしありをこしかゝりける
女ともたちとやまにまかりてか
てかなつかうし侍る

みそく

もみちは袖にこきいれてもていてなん
秋はかきりとみむ人のため

寛平御時ふるきうたのたてまつれとおほせられけれはたつた河もみちはなかるといふうたをかきて
そのおなしこゝろをよめりける
おきかせ　藤原
みやまよりおちくる水の色みてそ
秋はかきりと思ひしりぬる

題しらす　よみ人しらす

風ふけはおきつ白浪たつた山
夜半にや君かひとりこゆらん
ある人此哥ハ昔大和国
なりける人の女にある人すみ
わたりけりこの女親もなく
なりて家もわろくなり行
あひたにこの男かうちの国に
人をあひしりてかよひつゝ
かれやうにのみなりゆきけり
さりけれともつらけなるけし
きもみえてかうちへいくこと
に男の心のことくにしつゝ
いたしやりけれはあやしと思

てらしあかましにさとおもや
かくとうていうらく月の面白
うらかなしき夜ふうちくつまね
みるくせんこいのあかにうくれ
てらけまさ夜ふ夢ゆく
ことわりうるありしつ和歌
ろけし音を語ろくなるきれ

是ありきくてそれなりけりまうれ
うえし給らぬ鹿なきりとあれ
ひは是とえぬめ
たつみうしゆつあえの唐衣
龍田の山をかざしてぞかへ
もみぢも晴れぬとうち風ならで
にしきこそぬれ

貞観御時万葉集はいつ
はかりつくれるそとゝはせ給
ひけれはよみてたてまつりける
文屋ありすゑ
神無月時雨ふりをけるならのはの
なにおふ宮のふることそこれ
寛平御時歌たてまつり
けるついてにたてまつりける
大江千里
あしたつのひとりおくれてなくこゑは
雲のうへまてきこえつかなん
藤原かちをん
人しれすおもふ心は春霞
たちいてゝ君かめにもみえなん

歌めしける時にたてまつる
とてよみておくにかきつけ
てたてまつりける

伊勢

山川のをとにのみきくもゝしきを
身をはやなからみるよしもかな

古今倭歌集巻十九

雑躰

短哥

題しらず　読人しらず

あふことのまれなる色におもひそめわか身はつねに
あま雲のはるゝ時なくふしのねのもえつゝとはに
おもへともあふことかたしなにしかも人をうらみん
わたつみのおきをふかめておもひてし思ひはいまは
いたつらになりぬへらなりゆく水のたゆる時なく
かくなはに思みたれてふる雪のけなはけぬへく

おしへとも えこそまねいは 秋やまの 思ひなかし
あしひきの 山したかけの こかくれて たきにおちくる
あさはかし あさりしに 色まそても 人をまねへて
をみなへし いよゝまされ いとゆめて あはれくと
あさ露の 君をまちかね よはにおきて たちわかるゝ
まつたちの 衣のそてみ まつ露の きよゐはあく
をくへとし 秋おけわね 春のさえ よるにもくれ
あかれとおし

うへまつたまつりし時の
まくらことはみせあうらし
つらゆき

ちはやふる 神のみかきの 紅葉の 昔にたかひ
あめはれの 紙とりの山の 春きりみ かくてきりく
さゝなみの 雲しまかる 雨そふき 山とさきく
なにことを かみまつる かくるかし かきり大山の
もみちぬ えその上毎 神無月 しくれて
みつ浪の 庭しもくる うかいの 行きうつ
そことしに 晴るつきしく あかれる こよひつ
君をのみ ちまいとつふ すかいあの かくしたちみ
みよしのの わか思るを わうし恋く わうしなきに
かちこそも あやこそも やちくさ きさめきとし
もとつかの おかせしいえ まかくみ けにつゝと
伊勢の海の 浦の吉いつら 思なあめ とかりもなや
なみのをの えつきはし 思あつさと 秋あゝ玉の
年のつく 大宮にの えかつゝの いつまつの次

つらきとて かへす〳〵も ねやのうち さのみまかせ
いつはりと ぬるもあかぬ さらやしぬる

うかりけるはつせ〳〵の
つれなきあかつきの歌

壬生忠岑

ありあけの おもひのこせと あかつきは いつはりの夜の
いまよりも かへす〳〵 のちもまし あさきよの
あかつきに 今はかきりと うきまて うきことのかす
このよの 年のほとも あさまて きえてなけ
あかつきし 今しむかしの なかれこそ ちきりをきしも
ちきりをそ つれなくてこそ とかくへん こゝろそわれ

いつよりも あさかりせは はかなきの なにとして
恋しくて ちきりさけと わすれぬそ なにゆへか
かなしきに かくはれたし ていたらう ちりはてぬ
秋の夜の たまくらは秋の なからはと あさきまゝ
みつまても よるもあけみ みつかりよ わかれくしく
思ひかへさる こゑのきく おもふてをし 岸の松の
きつかは とものいまし ちりはまし 春はやる
なかしは 夏はやせ あさくしき 秋の晴霧の
うき世にし みやこへまて せめてかな かくとはに
うかふらに つゆの年月 おもひいくら いつくなる
帰るまて こゝの空なら まつやれ この世にいく
やうまて すまやしく ときには さらのかたに
あくしつゝ おもひのまゝ あさひと 有るのか
きみはの かみのこゝろ あすはかれ さをのか

かしまなる　いつみくよる　しらやま　ゆきうらは白く
なかぬらし　きとのの繁の　あくるあく　かけてし風なか
くもりまち　君かやちよ　ゆくらく　かくれた

君か世し逢坂山のあしまつ

ここちちまりと　ちかし　はなちきみ

冬の夜のあき

九河内館垣

ちはやふる　神なかりと　はさうは　くをもかなみ
あしたし　ともみちことは　うちちかの　よしのの山の
山おもし　こや日と来　ありやきは　王のちとせく
こふなつち　あくかたきた　しこたり　いやかに御世ち

庭のかけは　たうくれの　冬くさの　うくはなりしく
きつらふなみ　つくしうく　あくわの　まいにありし
そくつらふ

七条のかまのいうちかちちは

ありよきちかたまし

伊勢

おもつ波　ありのとき　まちつは　舞くさ住
このみきし　あまうしたら　風しらく　よしんなの
かのうは　波のしち心　くれ年は　まかくつみ
四雨ちらく　秋のなみつと　人くもし　まかつちく
まうなりえ　かうのちきちへ　おつりて　とはなれとは

花すゝき　君なき庭に　むれたちて　空をまねかは
はつかりの　なきわたりつゝ　よそにこそみめ

旋頭歌

題しらす　読人しらす

うちわたすをちかた人に物まうすわれ
そのそこにしろくさけるは
なにの花そも

返し

春されは野へにまつさく見れとあかぬ花
まひなしにたゝなのるへき
花の名なれや

題しらす

はつせ川ふる川のへに二もとある
すき年をへて又もあひみむ
二もとあるすき

貫之

君かさすみかさの山の紅葉はの
色神な月時雨のあめの
そめるなりけり

誹諧哥

見しよ　徳大寺

梅の花見にこそきつれうくひすの
ひとくひとくといとひしもをる

素性法師

山吹の花色衣ぬしやたれ
とへとこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはかほとゝきす
しての田をさを朝なあさなよふ

七月六日たなはたの心をよみ
ける　藤原のかねすけ
いつしかとまたく心をはきにあけて
あまのかはらをけふやわたらむ
題しらす　凡河内躬恒
むつこともまたつきなくにあけぬめり
いつらは秋のなかしてふよは

僧正遍昭
秋の野になまめきたてる女郎花
あなかしかまし花もひと時
よみ人しらす
秋くれは野辺にたはるゝ女郎花
いつれの人かつまてみるへき
秋霧のはれてくもれは女郎花

花のちることはうつろふいろそみる
あめともみえすちりくるはなをたえす
うらわかき雪のいろまさりける
寛平御時きさいの宮の
歌合のうた
藤原おきかせ
浦ちかくふりくる雪はしらなみの

すゑのまつやまこすかとそみる
あさたちてきたくしとしきゝよしの日とも
ならの家のうたあはせの雪
をかきにしきゆきえすそ
のとあまへきえつゝし
きれし
清原ふかやふ
ふゆなからそらのとかみゝきえ

けふはうちたちもちのまされ
是しもはよみ本しもは
又み神のよしなかの神ある
そのあみ御神をしつゝ後にの清ら
神よりまゐりてよりてまかるのさめくわた
せんころあるとこあるまつ
家しきうかさいし方へうめゆこまき

あまたりしとしあかいにせんは
わかあねやと申えてうあいきねそ
ぬいかまひみくにまてそへここ
みあみ山の口あしえてりつめ
思ひのつるみさていさめまれ御
是成み山田のうかいまつまるへ
我かしまいとてあられいまきこと

なみのと

うつゝの神のおもひ思ひはかゝ人
神まつるころのきねかたもしめ
きのあやとし

色みえてうつろふものはよの中の
人の心の花にそありける

小野小町

へあるよりおもはなしおもひそめて
おもひしりぬる心のほとをしりぬる

寛平御時きさいの宮の歌合の
歌

藤原おきかせ

春霞たなひく山のへの花かけに
かえるしかへつゝうつろはむやと

題しらす　よみ人しらす

思へとも猶うとまれぬ春霞
かゝらぬ山もあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉の妻恋に
とひたつ雉のほろゝとそ鳴

紀よしひと

秋の野に妻なき鹿の年をへて
なそわか恋のかひよとそなく

みつね

蝉の羽のひとへにうすき夏衣
なれはよりなんものにやはあらぬ

たゝみね

こもりぬのしたよりおふるねぬなはの

ねぬるかたにしるおいとふ

よみ人の

きとおもふ思ひそいとゝやるかたもなき

あつまちのなかそらにのみ

君てふ人のゆくゑしらすとも

たちかへりつゝきえぬへし

わすれてもとまる思ひとそなりぬへき

つゆやかなしかるらんかなしき

我身のゆくゑをもしらすなりにけり

そのかみをおもひあはすれは

思ひつゝ人をまちぬるよはかりの

わかれのみかなしきを

一本にかくあり

思ひきや人を[illegible]ことは思ひきや

海さしやまくらあふきやは
一かよへ人をとらめ
ゆきゝんく人めをしよしなきかに
陸のかはをあかしいぬこは
紀ゆめにのてたの海まさ
ゆきあくにをうつゝを夢や
ともなく我身は春の袖おもや

つらそゝにあかさりしかは
逢見てもたえぬ思ひは
我身は人のつまおもふかな
浮しき夏は人まねはうみ葉の
さやく霧夜のあかしのゆ
平中興
雲の月かせをさそふにかわぬまて

夜ふからてハ月なかりけり

左のおほいまうちきみ

もろこしのよしのゝ山にこもるとも
おくれんと思ふ我ならなくに

なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや
人の心を見てこそやまめ

伊勢

難波なるなからの橋もつくるなり
今は我身を何にたとへん

よみ人しらす

まめなれとなにそはよけくかるかやの
みたれてあれとあしけくもなし

おきかせ

何うらみあまたいとの情かるらん
志らぬ人とも思ひわかれなん
てこゝろかきたるかとこゝにはえて
へつふれきかはくろ
よそ人あらは我思ふとのおもひ六
毎へ六きさにすくにかも
足りしるへさぬる

ねさにこゑさつの國をやしたれ
もそてはあかたの杉と思ふめ

大輔

あかたにわれをしらしたゝくかねまえ
はつるきのまつまつかきさき

よみ人しらす

おもかけはさくのみはかなくて足成の

山のかひなくなりぬへらなり

人こふることををもにとになひもて
あふこなきこそわひしかりけれ

よひのまにいてゝいりぬるみか月の
われてものおもふころにもあるかな

そへにとてとすれはかゝりかくすれは
あないひしらすあふさきるさに

世の中のうきたひことに身をなけは
ふかき谷こそあさくなりなめ

在原もとかた

世の中はいかにくるしと思ふらん
こゝらの人にうらみらるれは

よみ人しらす

なにをして身のいたつらに老ぬらん

年乃思ひ出さそとやうし

おなこう也

みちをそへつ言葉つゝしもあるまし

はるまいつく花をとをろく

千さいと

白妙のそめしは秋かいあまつ雪と

心せこうは衣ぬめまするまさる

是しの　よみ人しらの

梅乃花さゝみ須のすかいや

ひさまみとのまへ入ゆまれ

法皇のしかいうかしゆれい

つまおくれ日座山八の尓日本

きみてゆくとも是あてよまし

てたらのきう　まつね

わひしらにましらなゝきそあしひきの
山のかひあるけふにやはあらぬ
題しらす　よみ人しらす
世をいとひこのもとことに立よりて
うつふしそめのあさのきぬ也

古今和歌集巻第二十

大哥所御哥
おほなほひの哥
新しき年のはしめにかくしこそ
ちとせをかねてたのしきをつめ
日本紀には　つかへまつらめよろ
つ代まてに

ゆふされは衣手さむしみよしのゝ
しらくもの山に降雪は
ゆめか晴かゝへかゝそゆらは
あさまゆき
あさまたきいはたのくらにふりつゝ
あさ山ゝ鳴あるぬゝのゝ
しゝく寒ゝ雪

水ゝ汚きの底かけは底とあは
積るみあさけの雪のあかし
しらの山か
しらゝ山打もる雪はかけはたの
雪ゝうくるたれかし　小町
神あるいのゝは
そゝさめく寒

祢りかきの山のさかきはゝ
神の見まへにしけりあひけり
宮やまときさとのさかきはかめ
たちいつへき神のみことに
まれもみなあめの山のやさかきを
ひとしみちのに山のうへさよ
三山のこ霰かきしとや風ふき

風さはやくうつろふ付ほと
陸奥のあふちのまへそうつりかうへ
ますみのこきのくれ
いつのこの井かみえさとのかくえ
かし風はやみくさむらの
ひとめかう
さゝのくまひのくまかはに駒とめて

志らしはうへの月かけなきん

かゐしきのうた

あかやまをかけてにほふる雲の
ぬれてぬるいを梅の花はうつり
まる〇うつるいろのすむ山かけはまち
にほふ若竹の春さかやうたい
此寿を祝和歌の浦への言の葉

四のうた

義経やくめのさうし山はうつしよ
君か名をたかし家も代まてね
こなたいのちの御代への言ゆ
ほくのみくるみうたい
春の国の代の藤のはなさきて
君かはるくに万代まてかし

これは元慶の御へのみのゝうた

君か世はかきりもあらし長はまの
まさこのかすはよみつくすとも

是は仁和の御への伊勢國のうた

大伴くろぬし

あふみのや鏡の山をたてたれは
かねてそ見ゆる君か千年を

これは今上の御へのあふみのうた

東歌

みちのくうた

あふくまにきりたちくもりあけぬとも

君をはやらしまてはすへなし

見ちのくはいつくはあれと塩かまの
浦こく舟のつなてかなしも

わかせこを都にやりて塩かまの
まかきの嶋のまつそこひしき

おくろさきみつのこしまの人ならは
都のつとにいさといはましを

みさふらひみかさと申せ宮木のの
木の下露は雨にまされり

もかみ河のほれはくたるいな舟の
いなにはあらすこの月はかり

君をゝきてあたし心を我もたは
すゑの松山浪もこえなん

さかみうた

こよろきのいそたちならしいそな摘
めさしぬらすなおきにをれ波

ひたちうた

つくはねのこのもかのもにかけはあれと
君かみかけにますかけはなし

つくはねの峯のもみちはおちつもり
しるもしらぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにもみしかけゝれなく
よこほりふせるさやの中山

甲斐かねをねこし山こし吹風を
人にもかもやことつてやらむ

伊勢うた

おふの浦にかたえさしおほひなるなしの

なりもならすもねてかたらはん
冬の賀茂のまつりの哥
藤原としゆきの朝臣
ちはや振かものやしろのひめこまつ
よろつ世ふとも色はかはらし
家々称証本之本乍書入
以墨滅哥今別書之

巻第十　物名部
ひくらし　つらゆき
そま人は宮木ひくらしあしひきの
山のやまひここゑとよむなり
右郭公下空蝉上
勝臣
かけりてもなにをかたまのきてもみん

かくれにはまたしものを
きこゝは紀友則下
つゆかゝしつゆまよ
一 晴とあらつまゝみてまみ
かくたけるつきみてまた
忠岑利貞下
あまね井きやうしゅ

まつとまち
契文乃井まこはやくあらかなし
まつしゅへの別あまた
かくきこ清行か
あめとみあめそい
あやまち
うきめ後のまよめとのまよみの後

雲のゐる川山はいとゝに
こゝろさし小萩のみつの
うめとのまもわしたくうつ
あまつそらまちの時のまゝあらく

榊下

巻第十一

奥山の萱の松しきいつる雪下

をちかへりえそしのはれぬほとゝきすかほのかたらひし
たかをしかはゝたゝくなるこそ
ほとゝきすかたらふ山のこのもとのあはれ
かならすもわひしきふるさとの

巻第十二

こゝにしもかゝる事のあはれ下
ぬれきぬとこゝの山わかれてなかす

いさとさこへよそちかくなるらむ
この哥ある人のいはくあめのみかと
ゐあめのうちのおほきみあふみへ名と
ぬし　うねめのたてまつる
山しなの音羽の瀧の音にのみ
人のしるへく我こひめやも

巻第十四

かよひゆめとみえしや秋の夜ゝは
うつゝのゆめのはかなさよみ
うきよにたちまよひて
つゆのいのちはかなくこの
うれへあるかよりてこそ
深き文なとふたゝひあり
見ことあるへし

はるのうた

道志らぬうつゝにかはるこゝろかな
岸よりもてぬいひきかへて

古今倭歌集序　紀淑望

夫和哥者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懐可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於

和歌有六義一曰風二曰賦三
曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春
鶯之囀花中秋蝉之吟樹上
雖無曲折各発歌謡物皆有之
自然之理也然而神世七代時
質人淳情欲無分和歌未作
逮于素戔烏尊到出雲国
始有三十一字之詠今反歌
之作也其後雖天神之孫海童
之女莫不以和歌通情者爰及
人代此風大興長歌短歌旋頭
混本之類雑体非一源流漸
繁譬猶払雲之樹生自
寸苗之煙浮天之波起於一

滴之露至如難波津之什献
天皇富緒川之篇報太子或事
関神異或興入幽玄但見上古
歌多存古質之語未為耳目
之翫徒為教戒之端古
天子毎良辰美景詔侍臣預
宴筵者献和歌君臣之情由

斯可見賢愚之性於是相分
所以随民之欲択士之才也自
大津皇子之初作詩賦詞人
才子慕風継塵移彼漢家
之字化我日域之俗民業一改
和歌漸衰然猶有先師柿本
大夫者高振神妙之思独歩

古今之間有山辺赤人者並和
歌仙也其余業和歌者綿々
不絶及彼時変澆漓人貴奢
淫詞雲興艶流泉涌其実皆落
其華独栄至有好色之家以此
為花鳥之使乞食之客以此
為活計之謀故半為婦人

之右難進大夫之前近代
存古風者纔二三人然長短
不同論以可弁華山僧正尤得
歌体然其詞華而少実如図画
好女徒動人情在原中将之歌
其情有余其詞不足如萎花
雖少彩色而有薫香文琳巧詠

物然其体近俗如賈人之着
鮮衣宇治山僧喜撰其詞華麗
而首尾停滞如望秋月遇暁雲
小野小町之歌古衣通姫之
流也然艶而無気力如病婦
之着花粉大友黒主之歌古猿
丸大夫之次也頗有逸興而

体甚鄙如田夫之息花前也
此外氏姓流聞者不可勝数其
大底皆以艶為基不知歌之趣
者也俗人争事栄利不用詠
和歌悲哉悲哉雖貴兼相将富
余金銭而骨未腐於土中名先滅於
世上適為後世被知者唯和歌之

人而已何者語近人耳義慣神明
也昔平城天子詔侍臣令撰
萬葉集自爾以来時歴十代
数過百年其後和歌弃不被採
雖風流如野宰相雅情如在納言
而皆以他才聞不以斯道顕
陛下御宇于今九載仁流秋津
洲之外恵茂筑波山之陰淵
変為瀬之聲寂々閉口砂
長為巌之頌洋々満耳思継
既絶之風欲興久廃之道爰詔
大内記紀友則御書所預紀貫
之前甲斐少目凡河内躬恒右衛門
府生壬生忠岑等各献家集并

古来旧歌曰續万葉集於是
重有詔部類所奉之歌勒為
二十巻名曰古今和歌集臣等
詞少春花之艶名竊秋夜之
長況哉進恐時俗之嘲退慙
才藝之拙適遇和歌之中
興以樂吾道之再昌嗟乎

人丸既没和歌不在斯哉于時
延喜五年歳次乙丑四月十八日
臣貫之等謹序

近衛殿信尋公　古今

古今二冊

近衛関白信尋公二半

たれてしあらぬ君ならなくに
ゆふやみ

あまのかるもにすむむしのわれからと
ねをこそなかめ世をはうらみし
九河内きつゐ

みをうしと思ふにきえぬものなれは
かくしてへぬる世にこそありけれ

よみ人しらす

あひ見ぬもうきもわか身のから衣
思ひしらすもとくるひもかな

寛平御時きさいの宮の
歌合歌

思ふてふことの葉のみや秋をへて
いろもかはらぬものにはあるらん